

第三者がやるべきこと

阿南第一中学校 一年 川野 広翔
かわの ひろと

（敬称略）

「なんで見ることしかできなかったのよ。」

母からの怒りと悲しみの声に僕は何も答えることができなかった。

これは、僕が小学生の頃の出来事だ。休み時間にはよくドッジボールをしていた。僕はそのころあまり運動が好きではなかったので、みんなが外で遊んでいるのを教室から眺めているだけだった。ある日、いつものように外を眺めていると、一人を何人かが囲んで話をしているようだった。

「何を話しているんだろう」と気になってほかの友達に聞いてみたけど誰も教えてくれなかった。

次の日も外を眺めていた。僕は、いつもと様子が違うと感じた。なぜなら、明らかに数名が一人を集中して狙っている様にしか見えなかったからだ。

最初は遊び半分なのだろうと思っていた。しかし、その考えは次第に不安に変わっていった。学校生活の中で、一人がのけ者にされている場面を見るようになった。

さらに、悪口を言われている状況もあった。日に日にエスカレートしていきると感じた。僕はそれらの行動をしている人たちとも仲が良かったので、「あいっとうっとうしいよな」といった言葉に胸が痛くなったけど、自分がいじめられるかもしれないという気持ちや、巻き込まれたくないという気持ちに勝てず、共感するような態度をとってしまっていた。

この最初のいじめはクラスの子が先生に報告をしたことで解決に向かっていったけれど、今度は報告しに行ってくれた子がいじめの対象になっていった。

僕は何もできないなりに何かしなくてはならないという気持ちがあり、お母さんに伝えることにした。冒頭の母の言葉は、その時にかけられた言葉だ。力強くもあり、悲しそうでもあったその母の言葉を僕はずっと忘れることができない。

僕はこの時の経験から、第三者にはなってはいけなさと心に誓った。僕は何もできなかった自分を後悔しているけど、第三者の罪の深さも悔やんでいる。第三者は簡単に言うのなら「いじめる側で協力している人」なのだ。でも自分がまきこまれるのが怖い気持ちや面倒だという自分の安全を

守るために第三者のままでいることも理解できる。僕は、できるだけ強い気持ちで第三者にならない努力を続けていきたい。第三者の存在が人の命を奪ってしまう可能性があることを胸に刻もうと思っている。第三者は簡単に何十人にも何百人にもなり、大勢のパワーで、人を傷つける。それならば、その大勢のパワーをいじめに立ち向かうパワーにしていきたい。少なくともその勇気が持てるように、そして自分がその第一歩を行動に移すことができるようになっていきたい。そうすれば少しずついいじめがこの世界からなくなっていくのだと思う。